

今、私は「言語文化」をどのように捉えるか

——「現実的な社会」における日本語教育について

津花 知子

1. はじめに
2. GBK受講前の立場
3. 「現実的な社会」と学習者のニーズ
4. 「現実的」ということ
5. 私にとっての言語文化
6. 日本語教師としての自分のあり方
7. おわりに

1. はじめに

3ヵ月のGBKで、当たり前だと思っていることを疑うこと、違う角度から物事を考えることを学んだ。特に自分が知らない間に身につけていた差別意識、ステレオタイプを通した物の見方を意識化することができたのが、自分にとって一番の収穫だったように思う。

受講の当初、私が講義を聞いて思ったのは「すばらしい。でも、現実的な社会にはそぐわない理想論だ」ということであった。しかし、講義が進むにつれ、次第に「現実的な社会」とは何か考えるようになった。そして、私が適応しようとしていた「現実的な社会」は、自分の外に存在する大きな揺るがしがたいものではなく、自分の内にあり、変わりうる、自らが変えうるものであることを知った。

今、この授業のテーマであった言語文化を、私は「私」がどんな環境においても、変わらない「私」になるための1つの手段ではないかと考える。本稿では、このよう

に考えるに至った経緯と共に、日本語教師としての自分のありかたについても考えた
い。

2. GBK受講前の立場

どうして私は日本語教師になりたいと考えたのだろうか？理由はいろいろあるのだが、
大きい理由の1つは、「日本語教育を通して、世界の人々と交流を深めたかったから」
である。日本語教師は日本語を教えることによって、世界の人々とコミュニケーション
できる。その時、言葉だけでなく日本の様々なことを伝え、同時に相手の国の
ことも学ぶ。そうすれば互いに理解できるし、外国の人も「いい日本人」である私と
交流すれば、日本に対しての印象もよくなるのではないだろうか。日本語教師は「民
間の親善大使」として世界に貢献できるすばらしい仕事だ——以前の私はそんなふう
に偽善的に考えていた。なぜ他の言語ではなく、日本語かといえば、外国語は結局自
分のものではないから。日本語は私の母語であり、すでに自分で理解しているものだ
から。それに、「日本語を学びたい」と思っている「親日的な」人となら、理解しあ
うのは易しいのではないだろうか。今振り返ると、その中には無意識のうちに、
「母語話者の優位性」が潜んでいたように思う。

そして、実際に中国で教え始め、見事に私の希望は打ち砕かれた。違う価値観の中
で生きている人々とコミュニケーションし、理解し合うのは生易しいことではないと
思い知った。それに「日本語を勉強したい＝日本や日本人が好き」などと考えるのは
短絡すぎる発想であった。気軽に「国際交流」などと口にできるのは、日本の常識が
通じる安全地帯にいるからで、自分には受け入れ難い価値観に出会い、自己のアイデ
ンティティーが危機にさらされるような状況では気軽に口にできるものではないと思
った。現実 is 厳しいと痛感した。

その当時、私は「文化」を地域から切り離せないその土地独自のものであると考え
ていた。そして、どんなに異文化を理解しようとしても、限界があると考えていた。
その上で、自分の中で「受け入れられる文化」と「受け入れられない文化」に線を引
き、「受け入れられない文化」については無理をして受け入れる必要はないと考えた。
しかし、異文化で暮らす時には、その国でタブーとされていることは控えるべきだと
考えた。

そこで、私は学生が日本人と接する時、日本ではタブーとされていることを行って

あらぬ誤解を受けたり、悪い印象を持たれないために、「転ばぬ先の杖」となるべく、「日本人は〇〇だ」「日本では△△する」といったいわゆる集団類型化された他人の文化論を教え始めた。もちろん、日本人をステレオタイプ化することに抵抗はあったが、現実に対応するにはそれが一番「効率的な」やり方だと考えていた。そこには母語話者として奢った気持ちなどなく、ただただ、いいコミュニケーション活動をしてほしい、という純粋な気持ちしかないつもりだった。

その一方で、「より日本人に近い自然な日本語が話したい」と望む現地の先生方や、弁論大会の出場者には、助詞の間違いから、発音、アクセントに至るまで、徹底的に「自然な日本語」を教えこんだ。そんな私への反応は「先生のおかげで日本のことがわかりました」「先生のおかげで弁論大会に優勝できました」「先生のおかげで日本語のレベルが上がりました」という肯定的な評価が圧倒的だった。それで、私も「学習者のニーズに応えられている」という満足感に浸っていた。

以上のような実体験があったので、文化Bの立場をとることに自信を持っていた私にとって、一般的な文化論や誤用訂正を否定する細川理論は、受け入れ難いものだった。確かに、頭ではなんとなく理解できる。しかし、目の前にいる学習者から「日本のことを知りたい」「もっときれいな日本語が話したい」という要望があるのに、それを無視することなどできない。現に、教室外の実社会では、日本語が上手で日本人のマナーをよく知っている方がメリットが多いに違いない。もし、日本の「常識」を知らなかったら、いやな目にあうかもしれないし、下手な日本語を話したらそれだけでバカにされてしまうかもしれない。私の学生がそんな目にあったら「かわいそうだ」。教師としてそれを見過ごすわけにはいかない。現実には甘くないのだ。細川理論は理想論にすぎない。そのように考えた私はその疑問をメールにも書いたし（10月16日）、他のクラスメートからも、似たような質問や体験談が授業中やMLの中であった。現場で教える教師としては当然の疑問だと思う。これに対し、「社会がどうだとか、皆がどうだかという前に、自分としてどう考えるか」が大切だ、という授業担当者からの回答はあったが、その時はあまり納得できていなかったように思う。

3. 「現実的な社会」と学習者のニーズ

言語文化について3ヵ月学んだ今、この問題について視点を変えて、もう1度考えてみようと思う。日本語が上手な方が得をする社会、日本人のマナーを知っている方が

受け入れられやすい社会，学習者はその社会で生きるためにニーズを見出している。

（注：この社会は集団化された「社会」）そもそもそのような「社会」は誰が作ったものだろう。現実には甘くない，では厳しい現実を作り出したのは誰なのだろう？学習者か？でも，学習者が日本語が上手で，日本のマナーも心得ている時，都合がいいのは誰だろう？「美しい日本語」の存在で優越感に浸れるのは誰だろう？——それは他でもない母語話者である日本人自身ではないだろうか。「国際社会」「共生」と言いながら，自分達が変わるのは面倒だ。だから外から来た人達に「同化」してほしい。そうすれば接触場面でのコミュニケーションもずっと楽になる。文法能力はもちろん，いわゆる「社会文化能力」を高めてもらえれば，もっと都合がいい。そして，多くのことが学習者に一方向的に期待され，期待に応えてくれた人にはそれなりの報酬がある。だから学習者もそれに応えようと努力するという図ができあがる。

と考えると，「間違いのない日本語が話したい」「日本人とつきあう時，恥かしくないように知識を得たい」というような「学習者のニーズ」というのは，そういう日本人社会に対応するためのものであり，つまり「母語話者のニーズ」ということにならないだろうか。もちろん「学習者のニーズ」は様々であり，全てがそうだとはい限らないが，多くはそれに当てはまるように思う。そのように考えると，日本語教師が純粋に「学習者が現実の社会で」なるべくスムーズに生きられるようにと，「学習者のために」していることは，果たして本当に「学習者のために」になっているのだろうか。実は母語話者の優位性を強化する手助けをしていると考えることはできないだろうか。「日本人とうまくコミュニケーションするために，日本人の習慣や物の考え方を理解しましょうね」というのは，思いやりからくるものであると多くの人は信じているけれど，裏を返せば，日本で「常識」とされているルールを破る者は認めないという排他性につながるのではないだろうか。

これについては，多くの人は以前の私も含め，無自覚である。実際，学習者のほうから，間違いを逐一直して欲しい，日本人の考え方や習慣を教えて欲しいと要求されることもあり，「日本人のようになる必要はないんだよ」などと言おうものなら，「日本語教師が何を言っているの？教えるのが仕事でしょう？」と職務怠慢と言わんばかりに反論されることもある。実際，自分が学習者だったら，間違いのないきれいな発音で話したい，マナー違反を犯したくないという気持ちもあるので，上で述べたような考えを持つことに正直自信がない。

ふと突飛な考えが浮かぶ。昔，男性優位が疑問もなく当たり前を受け入れられていた時代があった（と言われている）女性では自分の権利を主張しようなどとは考えてい

なかった。（ここでは便宜上「女性」を集団類型化する）学校や家庭では（女は学校に行けなかったかもしれないけれど），よき妻，よき母になるための教育がほどこされ，男性と同等になろうなどという考えは彼女達の頭には浮かびもしなかった。それが社会の現実，それが当たり前の社会だった。もちろんそんな時代でも，反体制の女性はいたかもしれないが，それは圧倒的に少数派で非常識な人であったに違いない。

これを，母語話者と非母語話者の関係に置き換えて考えるなら，さしずめ，日本語教師は花嫁学校の先生といったところだろう。「社会の現実」に即すべく，学習者が社会に受け入れられるよう「ニーズ」に応えている。教えるほうも教わるほうも，母語話者の優位性についてなど考えない。そんなことを考えるより，能力試験の1級に合格していい大学に入ったり，待遇表現でも覚えて給料をあげてもらったほうが得だ。

このようなたとえは適切ではないかもしれないが，今ある「現実」が「当然」のものと受け入れられている点で共通しているのではないだろうか。かつて男女平等という概念がなかった時代があったように，今は母語話者・非母語話者平等，という概念がほとんどない時代であるといえないだろうか。（本来はそうのように区別することにも問題があるのかもしれない）もちろん日本語教師自身，外国人を差別しているとか，低く見ているという意識はないけれど，私自身「日本のことを知らずに恥をかいたらかわいそう」と思っている時点で，すでに学習者を「弱い者」と見ている。「かわいそう」という概念は対等な関係ではありえないだろう。

4. 「現実的」ということ

以上のように考えると，私が今までそれに即して日本語教育を行おうとし，学習者にも適応させようとしてきた「現実の社会」は，決して普遍的なものではなく，「現実の社会」に無批判に適応しようとする人々によって，さらにその「現実」の度合いを強めていくのだと考えられる。つまり「現実は甘くないよ」「こんなの非現実的だ」と社会を外側から見てしまったら，何も変わらない，変われなくなってしまう。

G B Kの講義を聞いて，「でも現実的には不可能ではないだろうか」と考えた人が，私を含め，何人かいたように思う。しかし，私達は現実を変える，自分が変わる努力を少しでもしたのだろうか。自分が傍観者になって，現状批判をしても何も変わらない。もし，現実には不満を持ち，改善を望むなら，まず自分が，「個」として変わらなければならない。

自分自身が社会を外から眺める傍観者になってしまうと、誰かの都合で作られた集団化された「社会」に飲み込まれ流されてしまう。そうすると自分の置かれる環境が変わるたび、自分以外の何かのために、自分を変えなければならなくなる。

しかし、何も考えなければ、流されることは楽だ。頭を使わなくても、外から与えられる情報を取り入れ、みんなと同じようにしていればなんとなく安心する。けれども、それは本当に生きていることになるのだろうか。講義で聞いた「考えるのをやめるのは人間をやめること」という言葉を、最初はよく理解できなかったが、考えないということは、自分を放棄することで、自分がないということは、つまり人間ではないということなのかと今は理解している。

このように考えると、集団化された「現実的な社会」が存在する根拠は、時として、非常に安易でいい加減なもののようにも思われる。あちらこちらに、中身よりも、手軽さや便利さを追求しているものが見うけられる。多くの人が私も含め、マスコミや他人からの情報をよく考えず取り入れている。その結果できた「現実的な社会」は必ずしも正しい、いいものではないだろう。

5. 私にとっての言語文化

そこで、集団化された社会がどのようなものであっても、動じない強い自分になる必要が出てくる。この「強い自分」を講義では「柔軟で強固な自己アイデンティティ」と呼んだが、私は、それを持つための1つの手段が、言語文化であると考ええる。

この場合の「文化」は地域で区切られたものではなく、個人がそれぞれ持つ「個」の文化である。講義の当初は文化を地域から切り離せないでいたが、集団類型化が「個」と「個」のコミュニケーションを阻害することを学び、文化は個人に属するものだと考えられるようになった。

言語文化は、対象とのコミュニケーションを通して、自分をくぐり、自分を形にして（言葉にして）外に出したものだと思う。誰にでも「考えていること」はある。しかし、その中にはマスコミや他人からの情報が多く含まれていたり、まだなんとなく感じているだけの形になっていない気持ちもある。そのような雑多な塊から、無駄なものを剥ぎ取り、自分の文化として表に出したものが言語文化であると考ええる。誰かの受け売りを口にしたたり、実体験をエッセイ調でレポートにまとめるだけならたやすい。しかし、何かを引用せず、自分で考えたことを他の人にもわかるように論理的に

外言化することが、いかに難しく、骨の折れる作業であるかということは、この講義をとった人間なら、身を持って感じているだろう。自分を外言化することがこんなに難しいことなどと思ってもみなかった。何年も教育を受けてきたけれど、このような訓練は受けてこなかったからだろう。その結果、「私」を外言化しようとして、無駄な「情報」をとったら何も残らなかったという苦い思いもあるし、外言化したものを読んだら、自分の心の中にあるものとずいぶん違って愕然とすることもある。時に、考えの浅い部分を問われ、再考を迫られることもあるが、このような「考える」作業を通して、自分と向き合い、結果として「柔軟で強固な自己アイデンティティ」が確立する。苦労した分、このアイデンティティは簡単に壊れず、外側の環境の変化に動じることはない。

これを私の好きな「3匹の子豚」で説明してみると、私が今まで住んでいたのは「ワラの家」だったと思う。「ワラの家」は、自分をくぐらず外からの情報だけで作った「確固とした自己アイデンティティ」のない家。それは時間をかけず手軽に作れる代わりに、簡単にオオカミ（環境の変化、外からの圧力）に壊されてしまう。しかし、レンガ（言語文化）で作った家（柔軟で強固な自己アイデンティティ）は、時間がかかり大変だが、外から簡単に壊されることはない。

残念ながら、「現実の社会」には「ワラの家」があふれている。軽くて便利だが吹けば飛んでしまう。そこでいくらオオカミから身を守ろうとしても限界がある。日本語教師の仕事は、他の人に「ワラの家」のもろさを気がつかせ、新しく「レンガの家」を建てる手伝いをすることだと思う。そして、家ができてからも安心せず、常に補強したり、作り替える必要があるだろう。他人の家を建てる手伝いをする余裕があるからには、当然、自分の家もしっかり持っていないといけない。教師は相手に何か求めたり、させたりする前に、まず自分を振りかえることを忘れてはいけないと思う。

6. 日本語教師としての自分のあり方

G B Kの講義の中で、コミュニケーションや「個」の文化について考える講義内容が、日本語教育研究科の授業内容として少し離れているのではないかという疑問がクラスの中であったと記憶している。それを聞いた自分も、この講義は、コミュニケーション学科の学生や一般の日本人、特に思春期の中等教育の学生などを対象にした方がふさわしいような気がした。考える訓練は自分にとって大変勉強になったけれど、

日本語教師がそれを学ぶべき必然性は、受講当初はよくわかっていなかった。

「民間の親善大使」などと言いながら、以前の自分は日本語教師の仕事を過小評価していたように思う。日本語教師の仕事は、言葉や一般化された文化や習慣を教えることだと考えていたので、「人間形成」や「言語都市環境設計」もできてしまうなどとは思ってもみなかった。この講義を受けて日本語教師という仕事が益々素晴らしいものに思えてきたが、その一方で大きな責任を感じるようになった。

以前の無自覚な私は、表面的なコミュニケーションの円滑さを重視し、集団類型的な日本文化論、日本人論を与えて満足していたが、それは一歩間違えれば、同化政策や「個」を見失うステレオタイプ化につながる恐れがある。幸か不幸か、意識的であれ、無意識的であれ、日本語教師は学習者に影響を与えうるポジションにいる。「共生」といいながら、母語話者に都合のよい環境作りをするようなことがあってはならない。GBKで言語文化について考えた目的は、日本語教師としての責任を自覚し、学習者に「柔軟で強固なアイデンティティ」を確立させる援助者として、自ら、学習者に負けないアイデンティティを築くことにあったのではないかと考える。

今後、自分がどのような日本語教師になりたいかと考えた時、「北風と太陽」の太陽が頭に浮かぶ。例えば、学習者が「日本人は～」とステレオタイプの発言をした時、集団類型論の危険性を外からとうとう説明したり、「あなたは間違っている」と言うのではなく、「どうしてそう考えるのか」問いかけて、その人自身が気がついて、自分がまとっているステレオタイプの上着を自然に脱いで、「個」の文化を発見できるような手伝いができたらと思う。これは教授法マニュアルなど読んですぐ身につくテクニックではなく、私自身の人間としての本質が問われてくるように思う。

こう意識してから、他人のコミュニケーション活動も観察するようになったのだが、言葉は同じでも、印象や説得度はずいぶん違う。何が違うのか考えると、その表現方法や言いまわしもあるが、一番大きいのは、やはりその人の持つ人間性であろう。自分が教わったいい先生を思い出してみても、それらの先生は人間的に魅力的で尊敬できる人ばかりだった。となると、いい日本語教師になるためには、文法書や教授法を学ぶ以上に、自分を磨くことを怠ってはならない。そうすると、正に「日本語教師は職業ではない。生き方だ」ということになるのであろう。

このように自覚することで、私の教え方も変化している。まず、当然のことながら、軽々しく、「日本では」「日本人は」と言わなくなった。そして、文法的な正しさを追究する前に、相手の言いたいことを引き出す努力をするようになった。すると、不思議なことに今まで気になった学習者の間違いやアクセントの不自然さが気にならな

くなってきた。以前は一般の人が注意しない誤りを正してこそプロの日本語教師だと考えていたので、アクセントの間違い1つにも神経質になっていたところがあったが、そうする必要はないと思ったら、文法より、その人の中身に注目できるようになった。そして、集団類型的な発言をする人に対しては、刺激を与えるような反論を試みるが、これはなかなか難しい。理屈っぽいうるさい人と思われ、逆にコミュニケーションがうまくいかなかったという失敗もある。これについては1度ではなかなか伝わらず、根気が必要だと感じている。学校のほうではあいかわらずテキストを使い、能力試験対策などもやるが、学生に接する時の意識はこの講義を受けたおかげで大部変わったように思う。

7. おわりに

以上、「現実的な社会」を中心に言語文化と日本語教育について考えてきた。「私」について考える言語文化研究で、集団化された「社会」にこだわるのは、自分のどこかに、世界の平和を願う気持ちがあるからだと思う。以前は「民間親善大使としての日本語教師」と、自分が日本と外国の間を取り持つというような発想であったが、今はまず、言語文化教育を通して、人々が「個」と「個」のコミュニケーションをし、確固とした自己アイデンティティを築く手助けをすることを中心に考えたい。現在、起きている国家、民族、宗教などの差別や憎しみは、人を集団類型化し、個として見られないことが大きな原因の1つであると考え。言語文化教育は、人々を集団類型化から脱却させることで、世界の平和に貢献できるかもしれない。（新井さんも10月30日のメールで「日本語教育の究極の目的は世界平和では」と書いておられたが）このような考えは楽天的すぎるかもしれないが、今後もこのような理想を持って、日本語教育に携わっていきたいと思う。